

新入生 春の伝統

歌練で新入生を指導する應管。口調は厳しいが鼓舞の言葉が続いた



時代に合わせ言葉を配慮

歌練では、日程を事前に周知し、太鼓を使わないなど、近隣にも配慮する。言葉の使い方、唱歌会の應管の余興、近隣への配慮と、30年ほど前にはなかった取り組みだ。時代に対応し、団結と成長を促す機会として存在価値を磨いている。

とまって頑張る良さも知ってもらいたい」と歌練の意義を語る。

思いは新入生に届いたようだ。全日程が終わり解散した後「唱歌会」が開かれた。自由参加だったが、新入生の7割程度、200人ほどが再び集まった。恐ろしかった應管が漫才とダンスを披露して緊張を解き、自由発言を求めると、次々に手が上がり「歌練を経験できて良かった」と感謝の言葉が聞かれた。男子生徒は「推し(大好きな対象)ができて乗り越えられた。指導の言葉一つが尊敬できた。それはあなただです」と、堀内副團長に握手を求めた。

歌練では、日程を事前に周知し、太鼓を使わないなど、近隣にも配慮する。言葉の使い方、唱歌会の應管の余興、近隣への配慮と、30年ほど前にはなかった取り組みだ。時代に対応し、団結と成長を促す機会として存在価値を磨いている。

深志高 応援練習が進化

県内で最も古い伝統校・松本深志高校(松本市)に受け継がれる新入生対象の「応援練習」(歌練)が、時代に合わせ進化している。短時間に多くの応援歌を覚える厳しさは変わらない。ただ、指導役の應援團管理委員会(通称・應管)が発するのは、よく考えた鼓舞の言葉だ。「愛のある厳しさ」で新入生の心をつかんでいる。(高石雅也)



唱歌会でダンスを披露する應管2年生。恐ろしかった姿から一転した姿で、新入生の緊張を解いた

「愛のある厳しさ」心つかむ

本年度は14日までの4日間で15曲を覚えた。最終日の練習も会場の校舎屋上はぴりぴりした緊張感に包まれた。声量や動作に問題があると、應管が「やめろ!」と何度も止め、迫力ある声で指導をした。ただ、怒りにまかせて感情的な言葉はない。「音程が外れてもいいから一番でつけえ声で歌ってみろ!」「間違つて恥ずかしがつてんじゃねえ!間違いをカバーしたり、カバーされたりが団結だろう!」。新入生は「はいっ!」と大声で応じた。

本年度は、團長・桑島直優さん(17)、副團長・堀内颯太さん(17)、同・庄田桃子さん(17)の3年生3人が中心となり、2年生6人と一緒に指導方法を考えた。社会規範を重視し、個人を尊重する時代を踏まえ「個人の叱責はしない、伝統よりも人としての対応が大切、といった意識を共有している」。

その上で桑島團長は「個人が尊重される時代であっても、互いを鼓舞し、ま